

次世代へ つなぐ 平和への思い

青少年ピースフォーラム に中学生3人を派遣

市では、平成元年に平和都市宣言を行いました。そして、平和事業の一環として、中学生を被爆地（長崎市）に派遣する事業を平成16年度から行っています。今年度の派遣について中学校から参加者を募集した結果、林沙耶さん（東中3年・朝日理乃さん（双葉中3年）・井藤亜美さん（西中3年）の青少年ピースフォーラムへの派遣が決定。全国から集まった約300人の青少年と交流を深めるとともに、平和への思いを新たにしました。



双葉中学校3年
朝日理乃
Asahi Rino

「今、わたしにできること」

「平和でいられるために、今、わたしには何ができるのだろうか」「青少年ピースフォーラムに参加して深く考えさせられました。

被爆体験者の吉田さんは、「人の痛みが分かる心を持つように」とおっしゃいました。人の痛みが分かるからこそ争いがなく、平和な世界でいられるのだと思いました。

9日の式典では、国籍に関係なくたくさんの方が参加し、平和への強い思いを持っていました。長崎市では、わたしと同一年くらいのボランティアの人たちが「微力だけど無力じゃない」という言葉を大切にして活動しています。

わたしは「うつった人たちの強い気持ちに伝えられるように、戦争や核兵器の恐ろしさを理解し、平和の尊さを伝えていかなければならないと思いました。そして、一人でも多くの人に伝え、広げていきたいと思っています。

青少年ピースフォーラム

原子爆弾によって大きな被害を受けた長崎市が、戦争の悲惨さと原爆の恐ろしさ、平和の尊さについて、次世代を担う青少年に伝えるために平成5年から毎年開催しており、今年で16回目になります。

8月8日、9日の2日間、被爆体験者の講演や、爆心地付近の被爆建造物見学、9日の平和祈念式典に参列するなどして、原爆による被害の実態を自分たちの目で見て肌で感じ、原爆の恐ろしさや平和の尊さについて学びました。

■浦上天主堂

33年の年月をかけて築かれた東洋一のロマネスク様式（中世西ヨーロッパの建築様式）の大聖堂。昭和20年8月9日午前11時2分、長崎に投下された原爆により一瞬にして崩壊。再建された天主堂からは、原爆の爆風に耐えたアンジェラスの鐘が1日3回響き渡ります。



西中学校3年
井藤亜美
Ito Ami

「わたしたちにできること」

63年前に落とされた原爆。たった一つの原爆が奪ったものはかりしません。

今回のピースフォーラムで、被爆者の吉田さんという方からお話を伺い、原爆の恐ろしさや悲惨さ、そして大切な人たちを亡くした悲しみを知りました。

また、吉田さんは被爆で焼けただれた顔のため、世間の冷たい目にさらされ辛い思いをしてきました。原爆は命を奪うだけでなく、生き延びた人の人生まで大きく変えてしまうものだと分かりました。

「泣いても笑っても元の体には戻らない。被爆して生き延びたわたしには、平和や命の尊さを伝える義務がある」

吉田さんのこの言葉を聞いた時、今度はわたしたち若い世代が次の世代に平和と命の尊さを訴えていかなければならないと強く心に思いました。

世界から核や戦争がなくなり、みんなが笑顔で生活できる日が来るように。それが、原爆や戦争の犠牲者のためにわたしたちができることではないでしょうか。

■平和記念像

上空を指す右手は原爆の脅威、水平に伸びた左手は世界の平和、軽く閉じられたまぶたは原爆犠牲者の冥福を祈っているといわれています。



東中学校3年
林 沙耶
Hayashi Saya

「原爆の恐ろしさを忘れるな」

青少年ピースフォーラムでは、被爆者の方の話を聞いたり、被爆建造物を見たり、平和祈念式典へ参列したりしました。

被爆者の吉田さんの話の中で、原爆で亡くなった人も苦しみ、生き残った人も後遺症や差別によってつらい思いをしていて、原爆が及ぼした影響はとても大きいのだと感じました。

吉田さんは、平和の原点は「人の痛みが分かるということ」とおっしゃっていました。だからわたしは、人の痛みがしっかりと分かる人間になりたいと思いました。

わたしたちの使命は、今回の長崎での貴重な体験を生かし、戦争や原爆の恐ろしさを後世へ伝えていくことです。核兵器があっても人々を傷つけ苦しめるだけだということをしっかりと多くのの人に理解してもらい、一日でも早く世界から核兵器がなくなり、平和な世の中になる日が来ることを願っています。

【平和都市宣言】

私たちすべての市民は、全人類共通の願いである核兵器廃絶が一日も早く実現され、戦争のない恒久平和が達成されることを心から希求する。

この願いを込めて、世界のすべての人々との交流をすすめ、相互理解を深め、世界の平和を訴えるものである。

（平成元年 3月25日制定）